

## 御言葉キリストと魂との「結婚」

—クレルヴォーのベルナルドゥス『雅歌説教83〜85』—

桑 原 直 己

### 【1】はじめに

クレルヴォーのシトー会修道院長ベルナルドゥス (Bernardus de Clarevallensis, 1090-1153年) は、12世紀前半に活躍し、ヨーロッパ中世におけるキリスト教的靈性の方向を決定づけた神学者として知られている。彼は神秘思想家としてののみならず、教会と修道院との指導者としても活躍し、「最後の教父」、「蜜の流れる博士 Doctor Mellifluis」と称され、たとえばダンテの『神曲』『天国篇』でも言及されるなど、後世にいたるまで絶大な影響力を及ぼしている。特に彼は「愛の世紀」とも呼ばれる12世紀の時代精神を反映してか、キリスト教靈性史における独創的な「愛」の思想家として有名である。

この小論では、後期ベルナルドゥスの靈性上の主著とも言うべき大作『雅歌説教 *Sermones super Cantica Canticorum* (SCCと略記)』<sup>(1)</sup>の中でも、彼の神秘思想の中心をなす「愛」に関わる主要なテキストとして知られる第83説教から第85説教までに展開されている思想を概観することを意図している。

### 【2】『雅歌説教』の意義および第83〜第85説教の位置づけ

『雅歌説教』はカルトウジア会士ポルトのベルナルドゥス (Bernardus de Portis, 1152年没) の依頼により、1135年から没年の1153年にいたるまでの18年間、断続的に書き継がれたベルナルドゥス後期の大作である。36年末までに第1説教から第23説教までが書かれた後、一旦執筆は中断される。38年から第24説教以下の執筆が再開され、第65説教から第66説教までの執筆は43年のケルン教会会議の後とされる。第80説教は48年(ランス教会会議)以後に執筆されたことが知られている。最後の第84説教から第86説教まではベルナルドゥスの死の直前である53年頃に書かれ、『雅歌』三章一節の説教までで未完に終わっている。この作品では、ベルナルドゥス晩年の完成された形での神秘思想が展開されている。それは聖書および教父に関する広汎にして深い学識と、自らがその観想的な生活から得た体験に支えられており、アレクサンドリア学派以来の伝統にもとづき、『雅歌』のテキストの字義的な意味の奥にある神秘的な意味を

解き明かすことを目指している。またその文体も周到に彫琢を重ねた格調高いものである。

『雅歌』はラテン語では「*Canticum Canticorum* (歌の中の歌)」と呼ばれ、花婿と花嫁との愛を歌った祝婚歌であった。花婿と花嫁との関係は、旧約聖書本来(ユダヤ教)の文脈では神とイスラエルとの関係として理解されていた。キリスト教的文脈ではこの関係は神と教会との関係に移し替えられて理解されるが、同時に「花嫁」は信仰者の魂と理解することもできる。ベルナルドゥスは『雅歌』を特に「御言葉 Verbum」としての神(キリスト)と魂との関係として捉える視点を強調している。

先述のとおり、第80説教は48年以後、また特に第84説教から第86説教まではベルナルドゥスの死の直前である53年頃に執筆されたことが知られているが、第80説教以降の一連の説教は内容的には連続している。すなわち、本稿における考察の主題であり、ベルナルドゥスの「愛」の思想が展開される核心箇所である第83説教から第85説教までの部分に先立つ第80説教から第82説教までの部分では、御言葉と魂との親近性を確認するための霊的というよりは神学的な考察が展開されていた。この考察には論争的な背景がある。すなわち、48年にフランスのランスで開催された教会会議において、ポアティエの司教ギルベルドゥスが、御言葉と魂との同形性 *conformitas* の問題について異説を唱えていたので、その著書もろとも断罪された、という経緯である。第80説教ではこのギルベルドゥスの説についての言及があるために48年以後の作であることが知られるわけであ

るが、第80説教から第82説教までにおいて展開されている御言葉と魂との親近性・同形性をめぐる神学的考察は、第83説教以後の霊的な講話の理論的な土台となっているわけである。

### 【3】『雅歌説教83』—御言葉への愛と結婚

#### (1) 罪のうちにあっても神の像から似姿へと進みうる

—(SCC,83,1)

第83説教の冒頭において、ベルナルドゥスはそれまでの神学的考察の成果を要約して、それは以下のことを教えるためであった、と述べている。

「たとえそのように罪に定められ、絶望していても、わたしたちはこういいうすべての魂が、単に赦しと憐れみに対する希望によつて息を吹き返すことができるだけでなく、また神との契約関係に入ることを恐れず、天使らの王とともに甘美なくびきを引き寄せることをためらわないがゆえに、御言葉との結婚をあえて獲ようと努める理由を自分の内に認めることができる」。つまりベルナルドゥスは、御言葉と魂との同形性を拠り所として、罪の中にあるにもかかわらず人間の魂には御言葉と「結婚」する可能性があることを示した上で、魂が御言葉の像 *similitudo* へと高められることを知っている神のもとへと敢えて近づくようにと促している<sup>[2]</sup>。

#### (2) 神への立ち帰りから同形化へ—(SCC,83,2)

ベルナルドゥスによれば、「人間自然本性の偉大なる賜物」である努力が減衰することにより、人間自然本性の残部が汚されるという「創造者に対する不法」に対抗するために、神自身が「神的高貴さの標識が魂の中にいつまでも保持されるように」欲したものであり、それは魂が「自分自身の中に御言葉から警告する声」を絶えず聞くためであり、御言葉とともにとどまるか、それとも遠ざかっていった場合には立ち帰るためである。

「遠ざかる」「立ち帰る」といった表現は場所的な意味ではなく霊的な意味に解すべきである。すなわち、「魂はその意向によって、むしろ背反によって」神から遠ざかるのであるが、この状態は「自然本性の廃棄ではなく、欠陥である」。しかし、立ち帰って御言葉のもとへと回心している魂は御言葉によって刷新 *reformare* され、御言葉に同形化 *conformare* すべきである。そしてその同形化は神愛 *caritas* においてなされると言う<sup>(3)</sup>。

### (3) 御言葉との上下の落差を解消する「結婚」

—(SCC:833)

ベルナルドゥスによれば、「そのような同形性 *conformitas* は魂を御言葉と結婚させる」。なぜなら魂は、人間性という本性を通して似ている方、すなわち御言葉と、今度は意志を通してもそれに劣らず似ていることになるからであり、また魂は、自分が御言葉から愛されているように、自分でも御言葉を愛し返すからである。このように魂は完全に愛していることにより、御言葉と結婚することになる。この神愛によって、魂は人間の

教えに満足せず、御言葉に依りすがり、信頼を抱いて御言葉に近づき、すべてのことについて親しく御言葉に尋ねて相談し、考えられうるかぎり大胆に願望するようになる。

このことをベルナルドゥスは「霊的で聖なる結婚の契約 *contactus*」と呼ぶが、「契約」よりはむしろ「抱擁 *complexus* である」と言い直している。このことを「抱擁」と呼ぶ理由は、「同じことを意志し、また同じことを意志しないことによつて、二つの霊から一つの霊となる」からである。

ここでは一方は神であり、一方は人間であるというベルナルドゥスの落差が意志の一致を損なう懸念もない。「なぜなら愛は畏怖の念 *reverentia* を知らないからである」。つまり、愛において上下の落差は意味をなさなくなる。ベルナルドゥスは上下の関係を意味する「称賛すること *honorare*」と「愛すること *amare*」を対比する。「恐れること *horre*」と「狼狽すること *stupere*」「恐怖すること *metere*」「驚嘆すること *miror*」は神への「称賛」をもたすが、そうしたすべてのことは愛する者には見られない。愛している魂も愛すること以外は知らず、本来は称賛の対象となるべき神も愛されるよりも愛している。かくして両者は「花婿」と「花嫁」なのであり、その絆はいかなる絆、たとえば親子の絆よりも強いものであるとされる<sup>(4)</sup>。

### (4) 愛そのものとしての花婿 —(SCC:834)

「花婿」は「愛している者」であるのみならず「愛そのもの *ipsa amor*」であるとも言われる。ベルナルドゥスは「神は愛 *caritas* である」という『ヨハネ第一書簡』のテキストには「神

が尊いもの honor である」とは書かれていなかった、という事実を強調する。「神は主 Dominus として畏怖 timor を要求し、父 Pater として尊敬 honor を要求し、花婿 Sponsus として愛されること amari を要求する」が、「愛 amor」こそが最も優れ、卓越していると言う。愛がなければ畏怖は罰を伴う奴隷的なものであり、愛がなければ尊敬は恩恵を伴わず、真の尊敬ではなく単なる追従に過ぎなくなるからである。

「愛はそれ自身において自足的であり、愛はそれ自身により、かつそれ自身のゆえに喜ばしきものである。愛自身が功績であり、自分自身に対する報酬である。愛は自分以外に動機も成果も求めない。その収益は自分を味わうことである。わたしは愛するがゆえに、愛している。わたしは愛するために、愛している」。

ベルナルドゥスは、魂のあらゆる運動 motus、感情 sensus、情意 affectus の中で、それによって被造物が創造主に対して応答し、同じものでもって交互に報い合うことができるものは愛のみである、としている。

また、神は神を愛する人たちが、その愛によって至福となることを知っているがゆえに、神が人間を愛するとき、愛されることのほか何も欲しておられないと言う<sup>(5)</sup>。

#### (5) 愛の最高段階としての「花嫁の愛」(SCC, 83.5)

ここでベルナルドゥスは、愛には段階がある、とした上で「花嫁の愛」を人間の神に対する愛における最高段階に位置づけている。

ベルナルドゥスはその初期の著作である『神を愛することについて Liber de diligendo Deo (Dil. と略記)』<sup>(6)</sup>において、「主を賛美」してはいるがその動機が異なっている三種類の人々を枚挙している。すなわち、恐れを動機とする「奴隷 servus」、自己の欲望を動機とする「雇い人 mercenarius」、そして普遍的な律法としての神愛を動機としている「息子 filius」である。そこでは「息子」は靈性の最高段階を示すものとして提示されている<sup>(7)</sup>。しかし、我々の考察の対象である『雅歌説教』(83.5)においては「息子」は最高段階ではなく、「花嫁」がこれに優るものとして提示されている<sup>(8)</sup>。それは、「息子たち」も愛しているが、彼らは「遺産 hereditas」、すなわち愛そのものの以外の報酬のことを考えているからだ、と言う。

花嫁が愛する花婿から期待している報酬はただ愛だけであり、愛によって花嫁は満たされ、花婿も満足する。花婿は愛以外のものを求めないし、花嫁はこれ以外のものをとまない。それゆえ、彼は花婿であり、彼女は花嫁である。このような愛こそが花婿花嫁に固有のことであって、この愛には他のだれも、「息子」であつたとしても達しえない。また、「息子」には尊敬が要求されるが、花婿と花嫁との愛は命じられ、要求されるものではない。「花婿の愛、むしろ愛である花婿は、愛し返されることと信実とを求める」。「それゆえ愛された者〔花嫁〕を愛し返すことが花婿に許されるように、なぜ花嫁が、また「愛」の花嫁が愛してはいけないうのか。なぜ「愛」が愛されてはいけないうのか」と言う<sup>(9)</sup>。

(6) 全能力を挙げての愛—(3CC.83.6)

当然のことながら、花嫁は他のすべての者たちへの情愛 affectio を捨て、ただひたすら愛にのみ心を傾ける。「彼女は愛に對して愛し返すことで愛に応えなければならぬ」。

それは神から受ける愛との間に「豊かさ」の点で断絶があるからである。しかしながら、「たとえ被造物がより小さいがゆえに、より少ししか愛さないとしても、すべてを挙げて愛するなら、全体性があるところから欠けるものはない」とされる。要するに被造物として可能な限りにおいて愛せばよいわけである<sup>90</sup>。それゆえに、魂が自分の全存在をあげて御言葉を愛するということは、御言葉と結婚することを意味している。魂(花嫁)はもはや被造物の水準で御言葉(花婿)を愛することもできないし、また被造物の水準で御言葉から愛し返されることもできないからであつて、こうした両者の合意から、堅固な完全な結婚が成立する。

こうした愛は「甘美な祝福」「甘美な抱擁」「聖なる純潔な愛」「優しく甘美な愛」「誠実であると同様に晴朗な愛」「相互的な愛」「親密で堅固な愛」であり、それは両者を一つの肉においてではなく一つの霊において結びつけ両者はもはや一体となる。「神に結びつく者は一つの霊となる」(「一コリント」6:17) というパウロの言葉どおりに<sup>91</sup>。

[4] 『雅歌説教84』—神から探し求められて神を探し求める

続く第84説教および第85説教においては、愛の具体的なあり方としての「神を探し求める」(quaerere Deum)の意味が主題となる。第84説教においては、魂が神を探し求めることそのものの意味が、特にそれ以前に魂が神の側から先行的に愛されている、という事態との関連から説明されている。また、第85説教では、魂が御言葉である神を探し求める理由についての説明がなされている。

(1) 最大の善としての「神を探し求めること」

—(3CC.84.1)

ベルナルドゥスは「わたしの魂は、夜ごと、ふしどに恋い慕う人を *quoniam diligis* 探し求めた *quasi servum*」と「『雅歌』(3:1)のテキストから出発する。

ベルナルドゥスはこの箇所のもとの主題となつて「神を探し求めること」を魂の善の中でも最大の善であるとして「それは賜物の中で最初のものであるが、進歩においては最後のものである」。つまりこのことはあらゆる徳の完成とされているのである。

「神は足の歩みによつてではなく、欲求 *desiderium* によつて求められる」。この「聖なる欲求」は充足によつて消えるものではなく終わりなく無限に伸張する。「歓喜は全うされるが、欲求には終わりがないし、こうして探求にも終わりがない」<sup>92</sup>。

(2) 神の側から先行して探し求められている

—(SCC,84.2)

「大いなる善が大いなる悪に転化しないためには、確かにあなたがたの中で神を探し求める魂はすべて、神によって先立たれており、探し求める者である前に探し求められていた者であることを知らなければならない」。

つまり、人は神の側から先行して「探し求められて」おり、愛されていることを知り、このことに感謝しなければならない。こうして感謝を返さない者は神の前には最悪の者とみなされる<sup>93</sup>。

(3) 回心の場面においても神から先行して探し求められて

ている—(SCC,84.3)

これまで見てきたように、「わたしの魂は、夜ごと、ふしどに恋い慕う人を探し求めた」というテキストどおり魂は御言葉を探し求めるが、ベルナルドゥスは、魂はそれ以前に御言葉によって探し求められていたことに注意を喚起している。このことは回心の場面、すなわち神からいったん離反した魂が神に立ち帰る際にも妥当する。

「神に立ち帰りたいと望んでいる魂、神から探し求めていただきたいと望んでいる魂が、永遠の滅びにさらされ、打ち捨てられていと言うつもりはしない。そもそも神に立ち帰りたいというこの意志は、どこから来ているのか。それは御言葉によって魂がすでに訪ねられ探し求められていたということからである」<sup>94</sup>。

(4) 「神を探し求める意志」と「神を探し求める能力」

—(SCC,84.4)

ところで、ベルナルドゥスは神の恩恵 *gratia* に二つの段階を区別する。すなわち、第一の恩恵としての「神を探し求める意志」、第二の恩恵としての「神を探し求める能力」である。そして彼は、第二の恩恵をまだ受けていない魂、すなわち自分が愛している神に立ち帰りたいと望んではいても現実には立ち帰ることができない魂には、花嫁の言葉はそのまま当てはまらなと言。すなわち、『雅歌』の続くテキストに記された「起き出して町をめぐり」「通りや広場をめぐって恋い慕う人を探し求める」(『雅歌』3.3) という熱烈な態度が成立するためには、その魂はさらに自分自身が花婿の神から探し求められるのでなければならぬ。神から探し求められて初めて、『雅歌』の花嫁の記述にあるような熱烈さをもって花婿である神を探し求めることができる。ベルナルドゥスは、私たちは霊的に貧しいがゆえに、この憐れみが速やかにわたしたちに先だつて差し向けられるよう祈るようにと促している。

ベルナルドゥスは聴衆たちのうちの大多数は、すでに「キリストがわたしたちを愛した愛の内に歩んで」(『エフェソ』5.2 参照)、「素直な心で彼を探し求めている」(『知恵』1.1)であろう、と認めている。しかし、こうした先行的な恩恵のしるし、つまり救いのしるしを全然持ち合わせておらず、ただ自分自身だけを愛して、神を愛してはいない者もいることをも嘆いている<sup>95</sup>。

(5) 「探求」と「愛」との相互関係—(SCC,84.5)

ベルナルドゥスは「わたしの魂は恋い慕う人を探し求めた」という『雅歌』(3:2)のテキストにおける花嫁の言葉に戻り、「あなたは前に求められていないならば求めることができるし、前に愛されていないならば愛することができる」と述べる。ここでベルナルドゥスは、魂は神から「愛 dilectio」と「探求 questio」という二重の祝福 benedictio によって先行されていることを指摘している。両者は、愛が探求の原因であり、探求は愛の結果であり、確証であるという関係にある<sup>90</sup>。

(6) かつて神を裏切った者でも神を愛する者は恐れることはない——(3CC:346)

ベルナルドゥスは、回心した魂は神を裏切った場面から出発している、という点に注意を引き戻す。このような魂は審判者としての神を恐れることはないのか。

この問いに対してベルナルドゥスは、自らの魂が「わたしは愛しているがゆえに恐れてはいない。わたしが愛されていないのならば、愛することなどなかったはずである。だからわたしは愛されている」という確信をもって答えるのを聞く人は幸せである、と答える。愛されている者は恐れる必要がない。脅えなければならぬのは愛さない人たちである。

以上はいわば一般論であるが、さらにベルナルドゥスは自身の告白として、「わたしは自分が愛していることを疑うことができないうと同様に、愛する者として自分が愛されていることを疑うことはできない」という確信を表明している。その確信、キリストの愛に対する実感の根拠として、彼は自分が罪の中に

あったときに、すでにキリストが彼を探し求めたばかりでなく、彼にご自分を探し求めようとする望みまでも与えたこと、さらにキリストを探し求めさえすれば確実に見いだせるという自信までも与えられた、という体験をもつての「証し」を提示している。

そうした体験に裏打ちされて、ベルナルドゥスは『知恵の書』(9:6)に依拠しつつ「御言葉の霊は慈しみ深い」と述べている。「それは、御言葉のわたしに対するこの上ない慈愛、救霊への熱心、厚い愛情をわたしに実感させ、これらのことをわたしは知らない訳にはいかない。なぜなら聖霊は、神のいとも深い神秘までも探り、これらの考えが怒りではなく、平和の考えだということを知っておられるからである。キリストの慈しみを身に染みて悟ったわたし、すでにキリストとの和解を果たしたという自信を持っているわたしが、どうしてキリストを探し求める気にならないでおられようか」<sup>91</sup>。

(7) 霊性の初心者向けの聖書の典拠——(3CC:347)

第84説教の最後に、ベルナルドゥスは修道院に新たに入った修練士たちのような霊性生活の初心者たちに向けて、これまで述べてきたことを納得してもらうために聖書に記された預言の権威に対する信仰に訴えている。

「もし人がその妻を出し、彼女が彼のもとを去って、他の男のものとなれば、彼は彼女のもとに戻るだろうか。その女は損なわれ汚れてしまうではないか。だが、お前は多くの愛人と情事を重ねた。それにもかかわらず主は言われる、わたしのもと

に立ち帰れ、そうすればわたしはお前を受け入れよう、と」(「エレミヤ」3:2)。これは主なる神の言葉である。信仰を拒んではならない」と<sup>80</sup>。

### 【5】「雅歌説教85」―魂の側が御言葉を探し求める

#### 七つの理由

第84説教の主題は「魂が御言葉によって探し求められる」ということの意味、そして魂にとつてのそのことの必要性であった。続く第85説教の主題は花嫁である魂の側が、自分を探し求めてくれた花婿キリストをどのように探し求めるのか、ということである<sup>81</sup>。ベルナルドウスは魂が御言葉を探し求めることの理由として以下の七点を枚挙している。

「魂は御言葉を探し求め、(1) その叱責に同意しなければならぬ。(2) 魂は認識するために照明されなければならない。(3) 徳の道に進むために御言葉に依りすぎらなければならない。(4) 知恵を得るために御言葉によつて刷新されなければならない。(5) 美しくなるために同形とされなければならない。(6) 豊かな実を結ぶために結婚しなければならない。(7) 快活になるためには享受しなければならない。これらすべての理由で魂は御言葉を探し求める」。

以下の論述はこの「七つの理由」に即する形で展開している<sup>82</sup>。

#### (1) 叱責と承認―(SCC.85:1)

まず第一の理由、すなわち(1)の「叱責に対する魂の同意」

は魂に「善い意志」<sup>83</sup>をもたらし、魂に「生命」を与える<sup>84</sup>とされる。ベルナルドウスは「あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、その人と和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は拷問する者に引き渡すにちがいないから」(「マタイ」5:25) という福音書の言葉は、御言葉自身が自らを「訴える人」になぞらえた上での忠告であり、御言葉は「この人たちはいつも心において誤っている」(「詩篇」95:10)と語るることによって、わたしたちの肉肉的欲望に真っ向から反対されている、と解している。

しかしながらこの「和解」は困難をきわめ、自力では不可能である。なぜなら、肉肉的欲望を克服するためには、「自分と対立」し、「自分自身の敵対者」となり、「自分自身に対決して苦しく間断なく格闘」して「倦むことなく戦い」、「根付いた習慣と生来の傾向に決別する」ことが条件だからである。

そこでベルナルドウスは「あなたが和解できる御言葉を探し求めなさい。御言葉は自ら和解を生じさせているのであるから」と勧める。「こうしてあなたを脅かした者(訴え、叱責する御言葉)は優しくなり、注がれた恩恵は脅かした怒りよりもあなたを変えるのに有効に働くようになる」のであるから<sup>85</sup>。

#### (2) 認識と照明―(SCC.85:2)

(2)第二の「認識するための照明」は魂に「善に関する知識」をもたらし、魂を「健康」<sup>86</sup>にするものとされている。

「だが、あなたがすでに意志において和解するお方が何を欲しているかを知らないなら、あなたについてあなたが神に対し



て熱心であると言われず、むしろその熱心は認識に基づいていない(「ローマ」10:2)と言われはしないか。

ここで、やはりベルナルドゥスは「御言葉のどこに行く」ようにと忠告する。「御言葉は光である」(「ヨハネ」1:9)がゆえに、御言葉はご自分の望まれる道を教えてくれるであろうからである。

そして「あなたの意志が変化せず、あなたの理性が照明されており、そのため善を欲し知るようになっていながら、あなたの魂は大いに進歩している。魂は一方において(1) 生命を受け、他方において(2) 視力を受ける」<sup>(50)</sup>と励ます。

(3) 徳の道に進むために御言葉に依りすぎる

—(SCC, 85:36)

(3) 第三の「徳の道に進むために御言葉に依りすぎる」ことの必要性についての論述には四節が費やされており、そこでは魂を攻撃する「敵」についても言及されている。

上述(1)(2)の結果として「魂は(1)すでに生きており、(2)すでに見えており、すでに善の内に立っている。しかしそれは神の助力とわざに助けられてのことである。魂は御言葉の手によって励まされて立っている」。このように魂は無事に立っていたとしても、「立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」(「1コリント」10:21)という言葉が自分に向けて言われているように考えるようにとベルナルドゥスは勧告する。それは「(50c) 悪魔が攻撃し、(50c) 世が攻撃し、(50c) 人間も攻撃する」からである。結論から先に言えば、これら三

つの敵のうち最も手強いのは(50c)の「人間」、すなわち各人一人一人にとつての自分自身である。

「各人が各自に攻撃をしかける。人が自分自身を攻撃し、自分を破滅させるまでにいたっても、驚いてはいけない。こうしてあなたが自分であなた自身の手を抑制できるなら、他の人によって攻撃されることを恐れるには及ばない」。

「他の人」、すなわち「悪魔」や「世」のような外部の敵は比較的恐れるに足りないと言われるのは、外部の敵に対しては自らの意志をもって拒絶すればよいからである。

「あなたの手とはあなたの同意を意味する。為すべきでないことを悪魔に勧誘され、この世に促されたとき、あなたの同意を抑え、あなたの五体を不義の武器として提供せず、罪があなたの死すべき身体において支配するのを許さないならば、あなたは自分が善いことに熱心であることを証明したことになる。悪はあなたに害を全く与えず、むしろあなたに役立ったであろう」<sup>(50)</sup>。

「立っている人」を脅かすこれら三つの敵のそれぞれについてベルナルドゥスは、(50c) 悪魔は悪意のある妬みによって、(50c) 世は虚栄の風によって、(50c) 人間は自分自身の腐敗の重さによって滅びに駆り立てる、としている。

(50c)の「悪魔」の攻撃については、彼を助けたり、彼に同意するのを拒むなら、人は滅ぼされることはない。「こうして、あなたは自分自身の実質の重みによって圧迫された人が、自分の転落によっていつそう悩まされていることを、知るのである」。

(32) の「世」は悪意に根ざしているがゆえに、人を駆り立てる。世はすべての人を攻撃するが、その友だけを、つまり似合いの者だけを滅ぼす。ペルナルドゥスは「わたしは転落しないために、世の友となりたくない」とだけ述べる。

これらのことから (33) 人間が自己自身を最大に脅かすものであることが明らかとなる。というのは、人間は他人の襲撃がなくとも転落可能であるが、自分以外の他人の襲撃によつては、転落できないからである。

「自分の精神を支配する人間は町を占領する人に優る」という知者の言葉（『箴言』16:32 参照）に同意しつつペルナルドゥスは、「力」それも「高い所から授けられる力が必要である（『ルカ』24:49 参照）」と言う。「なぜなら、この力は完全であれば、精神が容易に自分に打ち勝つようになり、こうしてすべての敵に対して無敵なものとなすからである」<sup>(34)</sup>。

『詩篇』(24:3) には「主の山に登るものは誰か」とある。「山の頂に、つまり徳の完成に達しようと着手する人は誰でも、登攀がいかに困難であるかを、また御言葉の援助なしにはいかにうまくいかないかを知るであろう」。

「魂は自己に逆らうなら強くなり、自分がいつそう遅くされるなら、怒り・恐れ・欲望・喜びのすべてを理性の支配下にもたらすであろう。魂は有能な御者のように精神の馬車を操り、肉的情愛のすべてを抑えて、虜となし、肉の思いを理性の意向に一致して徳の従順に導くであろう」。

こうしたことは困難には違いないが、ペルナルドゥスは、す

べてをなし得るお方、すなわち御言葉に依りする人にはすべてが可能となる、と主張する。「御言葉に依り頼み上からの力を着た者をいかなる暴力も、欺瞞も、魅力ももはや彼が立つてるとき投げ倒したり、彼が支配しているとき屈従させたりできないであろう」<sup>(35)</sup>。こうして徳の道に進むことにより魂は「堅固さ *stabilitas*」<sup>(36)</sup> を獲得する。

このように、ペルナルドゥスは徳において進歩するために御言葉に依りすることが必要性を明らかにするが、同時に転落することのないよう傲慢に警戒するよう呼び掛ける。

「それゆえ立つている人が転落したくないなら、自分に頼らず、御言葉に寄り頼みなさい。御言葉は言う、「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」（『ヨハネ』15:5）と。こういうわけで、わたしたちは御言葉なしには善に向かって立ち上がることも、善にとどまることもできない」<sup>(37)</sup>。

(4) 知恵を得るための御言葉による刷新—(CCC.9579) (4) 第四の、「わたしたちが知恵を得るための御言葉による刷新」は魂に「成熟」<sup>(38)</sup> をもたらすとされるが、この点についての考察は以下の言葉から始まる。

「御言葉は力 *virtus*（＝徳）であり、知恵 *sapientia* である（『一コリント』1:24）。それゆえ、魂は力（徳）から力（徳）を、知恵から知恵を受け入れ、双方の贈り物を一つの御言葉に帰する」。しかし、御言葉における場合と人間における場合とは「力（徳）」と「知恵」との関係が異なることを指摘する。

「また、もしだれかがあらゆる点で力（徳）が知恵と同じだ

と思うなら、わたしはそれを拒否しないが、それは御言葉において言えるのであって、魂においてではない。なぜなら御言葉においてはその神的本性の独自の働きのゆえに一であるものが、魂においてはしかしながら同一の働きをもたないで、多様なものに関与するかのようになり、雑多で多様な必要に適應しているからである」。

つまり神においては一となっている「力〔徳〕」と「知恵」とは人間においては異なるのであり、両者を区別しなければならぬ。

「この知恵と力〔徳〕という二つの言葉の固有の意味を生かすためには、どうしても「力〔徳〕」という言葉は魂の活力 *vigor* という面に重点をおかねばならず、「知恵」という言葉は靈的甘美さ *suauius* を加味した、魂のほどよい調整をもつと強調しなければならない」。

つまり、人間の魂にあつて「知恵」は甘美さを特徴としているのである。パウロは「徳に関する多くの奨励をした後に、知恵に属することが甘美さの中に、聖靈の中に、あることを付言している（『コリント』6:6参照）。「徳の力で苦勞して獲得したものは、知恵によって享受される。知恵が秩序づけ、熟慮し、調整することを徳の力が実現する」<sup>(6)</sup>。

「休んでいる間に、知恵について書き記しなさい」（『シラ』38:24）と言う知者ソロモンの言葉にしたがい、ベルナルドウスは「知恵の休息は活動の中にある」と言う。「知恵は、休息すればするほど、独自の仕方でも働き出す。これに反して、徳は

試験に会えば会うほど、ますます輝きを放つ。厳しい試験や困難のさ中においてこそ、徳は輝きわたる。知恵を「徳に対する愛」と定義しても間違ひではない。愛のあるところ、そこにはもはや労苦を伴う働きがないからである。そこには楽しさだけがある」。

ここでベルナルドウスは「知恵 *sapientia*」という言葉が「味わい *sapor*」という言葉から由来しているのではないか、という一種の語源論的解釈を提起する。

「なぜなら、徳そのものは、味もそつけないものだが、知恵という名の調味料で味付けられると、一変して良い味わい、美味なる靈的味覚を人に与えるからである。だからわたしは、知恵とは善を美味しく味わうこと、善の味覚だと言えると思う」。

しかしながら「わたしたちはこの味わいを失っている。しかも人類の起源からほとんど失っている」。つまり、原罪による自然本性の墮落である。

にもかかわらず、「女性の心と身体とが再び知恵に満たされ、女性（イブ）を通して愚かな者と辱められたわたしたちは、女性（マリア）を通して知恵に向けて刷新される。そして今や知恵が入っている心において知恵は悪意をつねに征服している。そして悪意が引き入れた悪への味わいをより良い味わいをもつて追い払う。知恵が入ってくると肉の思いを愚弄し、知性を清め、心の味覚をいやし新たにします。味覚がいやされると、それは善を味わい、すべての善よりもより良いものとして知恵自体

を味わう」<sup>63</sup>。

このように、ベルナルドゥスは知恵を「善への味わい」として示した上で、善と悪とを味わうことの関係を以下のように整理してゆく。

多くの善がそれを行っている人々によって味わわれていないのは、「彼らは善への味わいではなくて、理性もしくはそれぞれの事情や必要によって強いられているから」である。「それに反して、悪を味わわずに、それを行っている多くの人々は、悪への味わいによってではなく、むしろ恐れや何かに対する欲望によってそれを行うように動かされる」。

「しかし、心の情愛にしたがつて行う人々は知者であつて、善への味わいによってそれを喜んでいるか、それとも悪意に満ちた人々に属しており、その他の利益を望んでおびき寄せられないときでも、悪を行うことを喜んでいる」。つまり悪意とは悪の味わいである。

「善への味わいと悪への嫌悪が全身を保護している精神は幸いである。この点が知恵へと刷新されるということであり、知恵の勝利を幸福にも経験することである」。

知恵の悪意に対する勝利は、悪への味わい（悪意）が取り除かれ、「善への最深の味わいが精神の内奥をあらゆる甘美さをもつて支配していると感じる」ことによって知られるからである。徳と知恵との関係について、ベルナルドゥスは「苦難を勇敢に耐えること、苦難の中にあつて知恵に対する喜びを懐くことは、徳に属している」が、「主がいかに恵み深いかを味わい知

ることは、知恵の働きに属する（『詩篇』34:9参照）」としている。また、これまでの諸理由を総合した視点から、「（3）徳はいわば確実な土台であつて、その上に（4）知恵がその家を建てる」とも述べている。しかし、（2）の「善に関する知識」がそれらに先行しなければならぬ。なぜなら、知恵の光と無知の闇間とは何の関係もないからである。また（1）の「善い意志」もそれらに先行すべきである。なぜなら、悪意に満ちた心には知恵は入ってゆかないからである<sup>64</sup>。

#### （5） 魂の美・御言葉との同形化としての「高潔さ」

—(SOC, 85:10-11)

第85説教10節においても、ベルナルドゥスは改めてこれまでの論を要約し、「今や魂は（1）意志の刷新によってその生命を、（2）教示によって健康を、（3）徳によって堅固さを、さらに（4）知恵によって成熟を回復することが明らかに知られた」とした上で、『詩篇』（45:12）の「王はあなたの美しさを慕う」という言葉にしたがい、次の課題を、（5）「魂がそれなしには人の子らのだれよりも美しいお方（花婿キリスト）」のお氣に召すことができない美しさをわたしたちが見いだすことである」としている。これまで枚挙してきた御言葉の賜物・（1）善い意志・（2）知識・（3）徳・（4）知恵という魂の善について聖書は何も語らず、ただ「王はあなたの美しさを慕う」とのみ語っているからである。

ベルナルドゥスはこの「魂の美」とはキリストに似ることとしての「高潔さ honestum」であると言つて<sup>65</sup>。

この美しさの明瞭な輝きが心の内奥を再び満たしたとき、それは必然的に外面にも現れ出る。「それによってすべての行動・談話・顔つき・歩み・笑いが輝いて反映する」。「この白衣によって精神はこの世との一致ではなく御言葉との栄光に輝く一致を自分のものとするであろう。それは永遠の生命を反映する輝き、神の実体の現れである光輝 splendor と類似像 figura であると記されている（『知恵』<sup>72</sup>、<sup>73</sup>「ヘブライ」1:3 参照）」<sup>74</sup>。

（6）御言葉との結婚—（SCC.85:12-13）

ベルナルドゥスは、この（5）までの段階に到達した魂は、次に（6）の「結婚」について考えようとする、と言う。

「魂は彼の気高さを恐れない。なぜなら自分に類似している姿が彼との交わりに結びつけ、愛が相合をもたらし、愛の表明が結婚に導くから」。「それゆえすべてを捨てて、あらゆる欲求を傾けて御言葉に依りすがり、御言葉によって自らを治め、御言葉によって生むものを御言葉から受け取り、「わたしにとって生きることはキリストであり、死ぬことは益である」（『フィリピ』1:11）と言うことができる魂を見るならば、それは御言葉と結婚した妻であると考えなさい」<sup>75</sup>。

ここでベルナルドゥスは「霊的な結婚には二種類の生む働きがあり、そこから対立はしていないが種類の相違した子どもが生まれる」と言う。「聖なる母たちは説教によって魂たちを、黙想によって霊的な認識を生む」。つまり、説教におけるある種の活動的な生と、（7）の段階に属する純粹に観想的な生との関係が述べられているのである。

精神が「御言葉によって実を結ぶこと」とは「多くの魂を救うこと」であり、このことは「母が子どもをえて喜ぶこと」になぞらえられる。このことは「隣人の必要が強く動かす」という<sup>76</sup>。つまり、それは他者の魂の救いをめざす隣人愛による一種の活動的な生を意味している。

（7）御言葉の享受—（SCC.85:13-14）

他方、霊的な認識によって「魂はときに身体的な感覚から離脱して分離し、御言葉を感得していても、自分自身を感じていない」、つまり「拉致 raptus」の体験に入る。このことが生じるのは、「精神が御言葉の言い表しえない甘美さによって惹き寄せられ、ある仕方で自分が自分自身から奪い去られ、否むしろ拉致されかつ脱落されるときである」。それは（7）の「御言葉を享受すること」のためである。「御言葉を享受すること」「離脱して御言葉と一緒にあること」「抱擁」は「御言葉の甘美さが招いている」が、「それは瞬時のことであり、稀な経験である」とされている<sup>77</sup>。

この「御言葉を享受する」とはいかなることを意味するかについては、ベルナルドゥスは「経験した者に尋ねるべきである」と述べている。また「御言葉を享受するとは何であるかを好奇心をもつて尋ねる」者は「御言葉に對し耳ではなく心を備えるべきだという」。「これは弁舌でもって教えられず、恩恵によって教えられる」。そして最後にベルナルドゥスは謙虚であるよう勧める。「謙虚は偉大な徳であり、偉大で崇高である。それは教えられ得ないことに値し、それ以上に学び得ないことを獲

得するに適している」<sup>40)</sup>。

## 【6】 結語

最後に、これまでの解明の成果をまとめておきたい。

本稿の考察対象である『雅歌説教』の第83説教から第85説教までの部分に先立つ第80説教から第82説教までの部分では、ランス教会会議での論争を踏まえて形成されてきた魂と御言葉キリストとの同形性をめぐる神学思想が展開されている。

『雅歌説教83』においては、この魂と御言葉キリストとの同形性の神学を背景に、ベルナルドゥスは魂が御言葉と「結婚」する可能性を肯定し、罪のうちにあっても神の像から似姿へと進むよう人々を促している。この同形化の可能性は回心した魂、すなわち一旦神から離反しながらも神へと立ち帰る魂にも認められる。そして「結婚」は神である御言葉と人間の魂との上下の落差を解消する。「花婿」キリストは魂を愛するのみならず、「愛そのもの」としても示される。さらに「花嫁の愛」は「神を愛することについて」においては最高段階とされていた「息子」に優る愛の最高段階として示される。そして、被造物が神との相互的愛の関係に入る以上、それは全能力を挙げての愛であることになる。

続く第84説教および第85説教においては、愛の具体的なあり方としての「神を探し求めること」の意味が主題となる。第84説教においては、魂が神を探し求めることそのものの意味を、

特にそれ以前に魂が神の側から先行的に愛されている、という事態との関連で解明されている。

まず、「神を探し求めること」は魂にとっての「最大の善」であることが示される。ただし、実は魂は神の側から先行して探し求められていることが指摘される。そして回心の場面、すなわち神からの離反からの立ち帰りにおいても神から先行して探し求められていると言う。魂の側について言えば「神を探し求める意志」と「神を探し求める能力」という二段階の恩恵によって支えられる。また、神の「探求」と「愛」とは相互に密接な関連にある二重性を示している。そして神を裏切った罪人であったとしても、神を愛する者は恐れないということが、特にベルナルドゥス自身の体験の証を通して主張される。最後にベルナルドゥスはこのことを霊性の初心者に向けて聖書の典拠に依拠して語っている。

第85説教の主題は花嫁である魂の側が、自分を探し求めてくれた花婿キリストをどのように探し求めるのか、ということである。ベルナルドゥスは魂が御言葉を探し求めることの理由として以下の七つを枚挙し、これに即して論を進めている。

- 「魂は御言葉を探し求め、(1) その叱責に同意しなければならない。(2) 魂は認識するために照明されなければならない。(3) 徳の道に進むために御言葉に依りすがらなければならない。(4) 知恵を得るために御言葉によって刷新されなければならない。(5) 美しくなるために同形とされなければならない。(6) 豊かな実を結ぶために結婚しなければならない。(7) 快

活になるためには享受しなければならない。これらすべての理由で魂は御言葉を探し求める」。

(1) の「叱責と承認」は「善い意志」をもたらし、魂を「生かす」。(2) の「認識と照明」は「善に関する知識」をもたらし、魂を「健康」にする。(3) の「徳の道に進む」ことに關しては魂を攻撃する敵、すなわち「悪魔」「世」「人間(自分自身)」との関連で考察される。最も手強い敵は自分自身であるが、これらの敵の攻撃に打ち勝って徳の道に進み、魂が「堅固さ」を獲得するためには御言葉に依りしめる必要があることが示される。(4) の「知恵」に関しては、ベルナルドゥスは知恵を「善への味わい」として示す。知恵は魂に「成熟」をもたらすが、そのためには御言葉によって刷新されなければならないことが示される。ベルナルドゥスは、(5) の「魂の美」はキリストとの同形化を意味する「高潔さ」にある、と言う。この(5) までの段階に到達した魂は、次に(6) の「結婚」について考えようとする、と言う。ここでベルナルドゥスは「霊的な結婚には二種類の生む働き」、つまり、他者の救済に奉仕する説教におけるある種の活動的な生と純粹に観想的な生との関係に言及する。後者は最後の(7)「御言葉を楽しむ」<sup>1)</sup>と、瞬時の稀な経験としての「拉致」の体験にまでつながる。このことの意味については、ベルナルドゥスは「経験した者に尋ねるべきである」と述べている。

本稿の考察対象である『雅歌説教』の第83説教から第85説教まではベルナルドゥス最晩年の筆になる彼の神秘思想の精髓を

示すものであるが、以上をもつて取りあえずその概観を与え得たものとしたい。

#### 注

(1) 原著のテキストは以下に依る。

Bernard de Clairvaux ; *Sermons sur le Cantique*, texte latin de J. Leclercq, H. Rochais et Ch.H. Talbot ; introduction, traduction et notes par Paul Verdeyen, Ralfaele Fassetta, Paris : Éditions du Cerf, 1996.

邦訳としては、金子晴勇訳『雅歌の説教』『キリスト教神秘主義著作集、2』所収、教文館、2005、山下房三郎訳『雅歌について』(一)～(四)、あかし書房、1977、がある。

(2) SCC, 83.1

(3) SCC, 83.2

(4) SCC, 83.3

(5) SCC, 83.4

(6) 原著のテキストは以下に依る。

Bernard de Clairvaux ; *L'amour de Dieu*, introductions, traductions, notes et index par Françoise Callot ... [et al.] Paris : Éditions du Cerf, 1993 ; Sources chrétiennes, no 393 [Œuvres complètes ; 29]

邦訳としては、金子晴勇訳『神を愛するについて』『キリスト教神秘主義著作集、2』所収、教文館、2005、古川勲訳『神への愛について』あかし書房、1982、がある。

- (7) *Dil.*<sup>34</sup>
- (8) 『神を愛することについて』および『雅歌説教』における「息子」と「花嫁」との関係については次の拙稿を参照。
- 拙稿「クレルヴォーのベルナルドゥスにおける「息子」と「花嫁」―『神を愛することについて』と『雅歌説教』―」(筑波大学哲学・思想専攻『哲学・思想論集』第35号)2010年3月。  
SCC,<sup>83,5</sup>
- (9) たとえば後世トマス・アクィナスは、全ての被造的能力は有限なるがゆえに、神をその善性に相応しい仕方でも無限に愛することはできないという意味で被造物の神への愛は完全ではあり得ないが、自己の全能力を挙げて愛する限りにおいて限定的な意味での完全な愛は成立可能である、<sup>35</sup>として。
- Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, II, II q.24 a.8 c.  
SCC,<sup>83,6</sup>
- (11) SCC,<sup>84,1</sup>
- (12) SCC,<sup>84,2</sup>
- (13) SCC,<sup>84,3</sup>
- (14) SCC,<sup>84,4</sup>
- (15) SCC,<sup>84,5</sup>
- (16) SCC,<sup>84,6</sup>
- (17) SCC,<sup>84,7</sup>
- (18) *ibid.*
- (19) SCC,<sup>85,1</sup>
- (20) SCC,<sup>85,1</sup>
- (21) SCC,<sup>85,10</sup>
- (22) SCC,<sup>85,3,10</sup>
- (23) SCC,<sup>85,1</sup>
- (24) SCC,<sup>85,10</sup>
- (25) SCC,<sup>85,2</sup>
- (26) SCC,<sup>85,3</sup>
- (27) SCC,<sup>85,4</sup>
- (28) SCC,<sup>85,5</sup>
- (29) SCC,<sup>85,10</sup>
- (30) SCC,<sup>85,6</sup>
- (31) SCC,<sup>85,10</sup>
- (32) SCC,<sup>85,7</sup>
- (33) SCC,<sup>85,8</sup>
- (34) SCC,<sup>85,9</sup>
- (35) SCC,<sup>85,10</sup>
- (36) SCC,<sup>85,11</sup>
- (37) SCC,<sup>85,12</sup>
- (38) SCC,<sup>85,13</sup>
- (39) *ibid.*
- (40) SCC,<sup>85,14</sup>

(くわばら・なおき

筑波大学大学院  
人文社会科学研究科教授)